

英語科研究プロジェクト

中高一貫教育における  
LL 学習指導のあり方を探る (1)  
(3年計画)

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

辻 弘・加藤 裕司・久保野雅史  
中村 豊・古賀 敦子・谷口 幸夫  
中村 美穂・長谷川和則 (学校教育部)

中高一貫教育における  
LL 学習指導のあり方を探る (1)  
(3年計画)

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

辻 弘・加藤 裕司・久保野雅史  
中村 豊・古賀 敦子・谷口 幸夫  
中村 美穂・長谷川和則 (学校教育部)

目次 (執筆・編集分担)

- § 0 LL 学習指導を再開するにあたって (久保野雅史)
- § 1 本校 LL 教室の歴史
  - (1) 旧 LL について (中村 豊)
  - (2) LL 教室設置の経緯 (加藤 裕司)
- § 2 本校 LL 教室の設備 (加藤 裕司)
- § 3 授業実践から
  - (1) 中学 1・2 年生 (43・42期生) (加藤 裕司)
  - (2) 中学 2 年生 (42期生) (久保野雅史)
- § 4 LL と語学部活動 (辻 弘)
- § 5 関連資料 (久保野雅史)
  - (1) 1989年度語学ラボラトリー学会 (LLA) 関東支部  
中学英語教育部会・「第4回研究会」
  - (2) LL 教室使用割当表・授業担当者 (1989-1990年度)

## § 0 LL 学習指導を再開するにあたって

1989年5月に、新館（7号館）建設と連動して進められていたLL教室の工事が完成した。それまで3号館3階にあった高校図書室及び司書室の機能が新館に移され、その跡地が新しいLL教室・LL準備室に充てられることになり、中学1年～高校2年の5学年に対して原則として週1時間LL授業を実施することになった。

「1989年度、研究プロジェクト計画」（資料1）に基いて実施された1989年5月～1990年3月までの約1年間の実践を整理することによって、本校のLL教育がこれから目指す方向性を定めて行く足がかりとすることが本稿の一つの目的であった。しかし1990年3月に3名が転出・退職し、4月より新しい3名のスタッフを迎えることになった為、授業実践報告は大変に手薄なものとなった。この部分は1990年度の研究をもとに次年度に発表の機会を設定することとした。

この節のタイトルに「再開する」とあるように、本校では1965年～1975年頃までの10年間、LL教室を使って授業が行われていたという事実がある。「温故知新」・「失敗は成功の母」の諺にならって旧LL教室時代の設備・授業をふりかえり、故障・使用不能状態から廃棄に至った経緯、また約15年間の空白の後に再びLL教室が設置されるに至った過程を明らかにして行きたい。そして、旧LLから現LLへと流れるLL教育の目標とは何か。また、視聴覚（AV）機器の飛躍的な進歩により、A（audio 音声）だけでなくV（visual 映像）も教材として活用できるようになった現在のLL教育において「何ができるのか・何をなすべきなのか」について継続して考えていく土台としたい。

1960年代の第一次LLブームのあと叫ばれた「LL不要論」にもかかわらず、近頃、再びLL教育が見直され、中学・高校・大学でその設置が急ピッチで進んでいる（資料2）。しかし、現在の第二次LLブームの中だからこそ余計に、「LL不要論」に対する明確な回答や現在LLAでも討議されている「LL授業の定義とは何か——LL教室で授業を行う必要性・必然性——」について、常に意識的でなければならないのは言うまでもない。

「授業初めにありき、機器を求む」であるはずが、「機器初めにありき、……」に陥ってしまう危険性があることは絶えず自戒しなければならないだろう。

研究内容
<p>(文部省学校基本調査等、対外的資料の基礎ともなります。なるべく正確に 分りやすく過不足なく記入して下さい。)</p> <p>本校においては本年度よりLCA教室が設置され、英語の 授業においては多くの課外活動においても、特に音声 面の個人学習が可能となった。</p> <p>本年度と研究初年度とを「研究年」としてあるように、 LCA学習指導と本校生徒にとり行われ、英語科が一大 分野として研究することと、当面の課題となった。新指導 要領にもあるように、中学では「技能の向上」聞くこと 「話すこと」が「コミュニケーション」の中心として 「oral communication」の中心として、LCAに重点を 置かれることとなり、聞く力、話す力の育成には特に重 点があてられることとなった。本校においては、この点も 具體的な指導の中心としてLCA学習を扱っている。1 年目である1989年度は、すでに設置されたLCA(探検) 及び購入済みのソフト(テキスト、ソフト)の面からどのよう な指導が可能か考えていくことに、中高一貫校として 使った授業の実践報告記録をまとめた。あるいはLCA 学習指導法を探ることにした。</p>
MAY 6 1989

研究内容			
英語科研究プロジェクト			
代表者	久保野雅史		
構成員	楠原信之、加藤裕司、及保野雅史、 熊井信弘、土弘、中村豊、長谷川和則		
研究テーマ	中高一貫教育におけるLCA学習指導のあり方 を探る〈3ヶ年計画〉		
研究に關する出張・研修先			
年・月・日	出張・研修先		
89. 9. 2	語学ボランティア学会(LCA)研究会 総 会		
9. 11. 12	関東甲信越英語教育学会		
9. 11. 19	語学研究所 研究大会 全英連大会		
研究成果の発表場(研究会・研修会・研究誌等……校内外を含む)			
年・月・日	研究会・研修会・研究誌等の名称	発表・執筆者	
89. 11. 20	LCA関係校 中高一貫研究会		
研究発表	資料費 円	備品費 円	費 円
	印刷費 円	人権費 円	費 円
	交通費 円	合計 円	円

# Language Labs' Popularity Seen At 'Seminar House'

By Kaoru Yokoi  
Daily Yomiuri Staff Writer

As more high schools and middle schools attempt to emphasize listening and speaking skills in their teaching of English, language laboratories with audiovisual equipment play an increasingly important role.

Some teachers, however, have difficulty in actually using the equipment, and some schools do not have any.

An example of how audiovisual equipment is used can be found at the Seminar House of the Kumagaya Municipal Girls' Senior High School in Kumagaya, Saitama-ken.

Completed in May, the Seminar House is a white, two-story building with floor space of 1,018 square meters. It accommodates two language laboratories, three small seminar rooms, a large audiovisual hall, and a foreign language staff room.

One of the two language laboratories has 48 booths equipped with up-to-date recorders, headphones, and TV monitors. Each student can converse through her headphone with the classmate next to her, or with the teacher at the "control desk," through her headphone. Students can also receive the teacher's instructions, questions, and an-

swers on their TV monitors. Seminar rooms are used mainly for speaking activities for small groups of students, or for English club activities. The audiovisual hall, on the second floor, can accommodate about 230 students for watching movies and other educational programs.

Teachers at the school especially emphasize the use of the language laboratories. "Individual communication through headphones or TV screens enable each student to concentrate on her work," said Shinji Kobayashi, a head teacher of the school's foreign language department.

"We are not yet making 100 percent use of this newest equipment, but we are learning gradually. So are the students," he said. He added that one of the school's younger teachers, Toshimitsu Kurihara, was showing leadership in the use of the equipment.

Most of the students, especially those in a foreign language course, seemed to like studying in the language laboratories. "The language laboratory is more comfortable than ordinary classrooms because it is well-lighted, air-conditioned and carpeted. It is also fun to use the equipment," one of the students said.

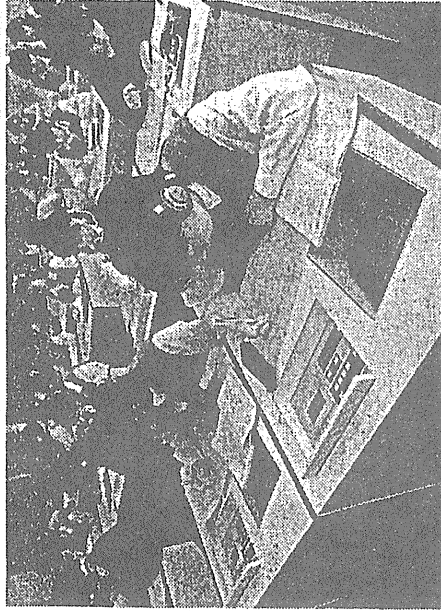
Kumagaya Municipal Girls' Senior High School established its foreign language course in 1988 to try

to develop students' abilities to understand different cultures and senses of values. The number of applicants has been rising for the past two years, and 128 students are currently enrolled in the course. Students in the foreign language course must earn 26 credits in English, 11 more than students in the general course.

The school also offers a summer exchange program. The school formed a sister school relationship with Muhlenberg High School in the U.S. state of Pennsylvania last year. Second-year students can apply for a homestay program of about one month. The school is planning to send 14 students to the United States this summer, and receive about 10 students from Muhlenberg High School.

"Through all these programs, including effective English education in our Seminar House, we are trying to promote international education," said principal Shinzen Yoshitake.

According to the Saitama Prefectural Board of Education, because the Education Ministry recently has encouraged the teaching of listening and speaking and the effective use of language laboratories, many schools in Saitama-ken are attempting to install well-equipped language laboratories. Some also hope to establish a foreign language



FIRST-YEAR STUDENTS of Kumagaya Municipal Girls' High School's foreign language course concentrate on their work in the language laboratory of the school's new Seminar House. —Daily Yomiuri photo by Toshikatsu Ohsunai

transferred to another school, as sometimes happens, the other teachers are suddenly at a loss. The important thing is that all teachers should learn how to use it," the official said.

The board is also planning to publish a manual by the end of this academic year on how to use a language laboratory.

It remains to be seen whether Kumagaya Municipal Girls' Senior High School's Seminar House will prove truly effective at teaching English. To upgrade foreign language education, however, it seems important for English teachers to be ready to learn about language laboratories as students are to learn the foreign language.

courses like that of Kumagaya Municipal Girls' Senior High School, and attract students by offering international education.

Not all schools, however, can pursue such plans smoothly. Of 162 public high schools in Saitama-ken, only about 30 schools have installed language laboratories, according to the board of education. The board hopes to increase the number to 88 in three or four years.

"Not all teachers are able to make effective use of language laboratories. I have heard about equipment left unused and covered with dust," said an official of the board.

"It helps a great deal if there is one teacher who knows how to use it. But if that particular teacher is

## § 1 本校 LL 教室の歴史

### (1) 旧 LL について

1. 設置年度：1965〔昭和40〕年4月

2. 設置場所：現432教室～433教室（1B～1C）

（調整室を含めて2教室分の面積）

3. 機種：SONY LL

48ブース

オープンテープレコーダー使用

4. 機能：音声面に関しては最新の機種と大差なし。LL設置に先立って本校PTA機関紙「駒場会報」に掲載された保護者向けの説明記事から抜粋する。（資料3参照）

### 5. LLの使用

(1) LL配當時数：明確な記録は残っていないが、高校は各学級週1時間とし、中学に可能な限り多くの時数を与えた。早朝や放課後には中学語学部などが利用した。

(2) 教材：中学は主として検定教科書付きテープ、高校はリングフォン米会話など。

6. 使用効果：数量的な測定結果は残っていない。

7. 問題点：(1) カセットテープが普及する以前で、オープンテープだったため、テープを切る生徒が毎時間何人も出て、教師はテープつなぎに忙しく、この機種のもつ様々な機能を十分には活用できなかった。

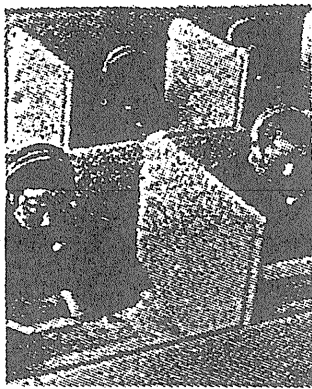
(2) 調整室がLLの後部に置かれ、生徒を背後から眺める形である上に、調整室の窓がそれほど大きくはなかったため、死角ができ、生徒の管理がしにくかった。

8. 旧LLの廃棄：電気製品の耐用年数といわれる10年を過ぎた頃から、生徒の乱暴な使い方のせいもあって、故障のブースがいくつも出て、健全なブースの数がクラス全員分揃わなくなり、語学部等の活動以外、LLでの授業は不可能となった。昭和60年度の校舎大改修の折りにLL機器は廃棄され、旧LL教室は普通教室2室に生まれ変わった。1989〔平成元〕年4月に新LLが完成するまで約15年間LLの授業は中断されたままだった。

☆☆☆  
語学演習室 (L・L) について  
☆☆☆

本校にも近くL・Lが設置されることになりました。現在では外国語科を有する大学のみならず、全国の高校、中学校でL・Lを設けつつあり、その威力が証明されております。

外国語の習得は、先ず聞く力、話す力を基礎にしていることは一般に認められております。従来の教室での集団授業では全生徒一人一人について、発音を限られた時間内に徹底的に習得させることや、外からの雑音に妨げられることなく、本国人の吹き込んだレコードやテープを等質音で聞き取らせ理解させることや、又、他の生徒に対し恥かしい気持を懐かせることなく生徒個々の能力に応じた会話練習を行なわせることに困難な点が多くありました。そこでL・Lが、それらの不便を解消するのみならず集団のままで、本国人と一对一の面接授業を行なうに等しい状態を作り出す為に考案され



ました。現在では外国語科を有する大学のみならず、全国の高校、中学校でL・Lを設けつつあり、その威力が証明されております。L・Lは、生徒数分の、プース(衝立付机)、テープレコーダー、マイク、イヤホンが生徒側に、教師側には、数台のテープレコーダー、レコードプレーヤー、生徒数分のスイッチや、調整つまみ、マイク、イヤホンの付いたマスターコンソールが備わり、両者が有機的に配線されています。このス

イッチの操作によって、一種又は数種の録音教材を同時に送り、生徒にイヤホンで外部からの雑音に妨げられることなく聞き取らせ同時に備付けのテープレコーダーに録音させます。次にその録音を各自が繰返し聞いて発音練習をします。その練習の様子が、教師側のスイッチ操作で生徒に気付かれることなく教師に傍受でき、各々に適切な指導を与えることができ、更に生徒は自分の発音を録音し、再生して教材として送られた模範発音と比較研究でき、自動的に自己の欠点を正すことができ、生徒は押ボタンによって教師に質問の合図をし、教師は生徒個々と問答をすることができ、又生徒対生徒の会話も教師のスイッチ操作で可能となります。プースは衝立で区切られているので、他の生徒が気にならず、引込思案な生徒も活発に授業に参加できます。大抵は、この装置に、スライドや八ミリ映画を併用し更に大きい効果を挙げています。

## (2) LL 教室設置の経緯

LL 教室は、1985年度（昭和60年度）の校舎改修の時まで、4号館3階にあったが、その時点でオープンリールによる旧式のLLシステムは稼働不能の状態にあった。その時点まで毎年LLシステムの更新を概算要求していたが、実現しなかった。校舎改修時に、3階に普通教室3教室・電算機室・電算機準備室を設置することになり、LL教室は廃止されることとなった。LL教室は、当時構想段階にあった総合教育棟（現在の7号館）の中に設置するというので、英語科はLL教室の当面の廃止を認めたのであった。

しかし、総合教育棟が7号館として実際に建築される段階になって、設計者である東京都立大の学校建築の権威であられる長倉教授によって、LL教室のような特殊な目的の教室が多目的用途を持つ7号館の中に組み込まれることは、本来の建物の設計主旨からはずれると指摘され、LL教室は7号館内に設置されないこととなった。

当時、7号館の構想に関わっていた将来計画構想委員会（岡本・大道・小林・加藤・佐藤）は、LL教室を当時の高校図書室に設置する案を示した。その方針に従って、概算要求として7号館総合メディアセンターシステムと同時にLL教室設置の要求が取り上げられることとなった。そして、7号館完成の翌年度である1988年度（昭和63年度）に、全く好運なことに、その予算がつき現在に至っている。

## § 2 本校 LL 教室の設備

本校LL教室の設計に当たって、特に留意したのは、次の項目である。

1. 音声だけでなく、映像情報も提供できること。
2. アナライザーによる情報を、コンピュータで処理し、ディスクットにデータを落とすことができること。
3. 複数の映像・音声情報を生徒に送ることができること。
4. LL準備室内の機器の情報も、LL教室に送り出せること。
5. マスターコンソールの操作が容易であること。
6. 7号館とAV情報のネットワーク化を図ることができるシステムであること。

これらの項目のうち、特に、3の項目については、当初、最大3種類の映像情報を、生徒側が選択できるようにしたかったのだが、予算の関係で、教師側の選択により最大3種類の映像情報をブースの3つの島に個別に送り出せる形にとどまった。

LL教室配置図・映像系統図・LL教室機器構成図・LL教室機器一覧・保有LL教材一覧を次に示す。

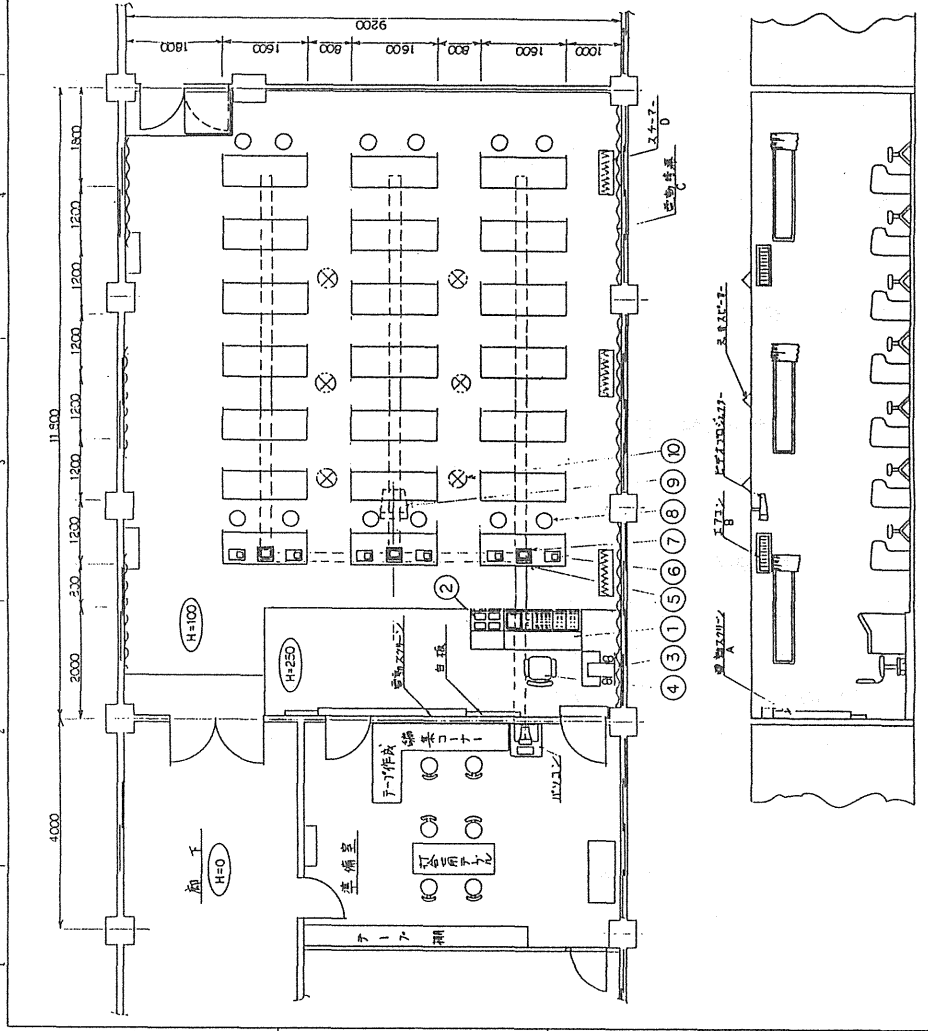
(注) LL教材一覧のメディア項目のVはビデオ教材・Lはレーザーディスク教材・Aはカセットテープ教材を表す。cは、クローズド・キャプション<sup>※</sup>付きのもの。

※聴覚障害者のために専用アダプターを用いて直面に出すことができる簡潔な字幕（英語）。



1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

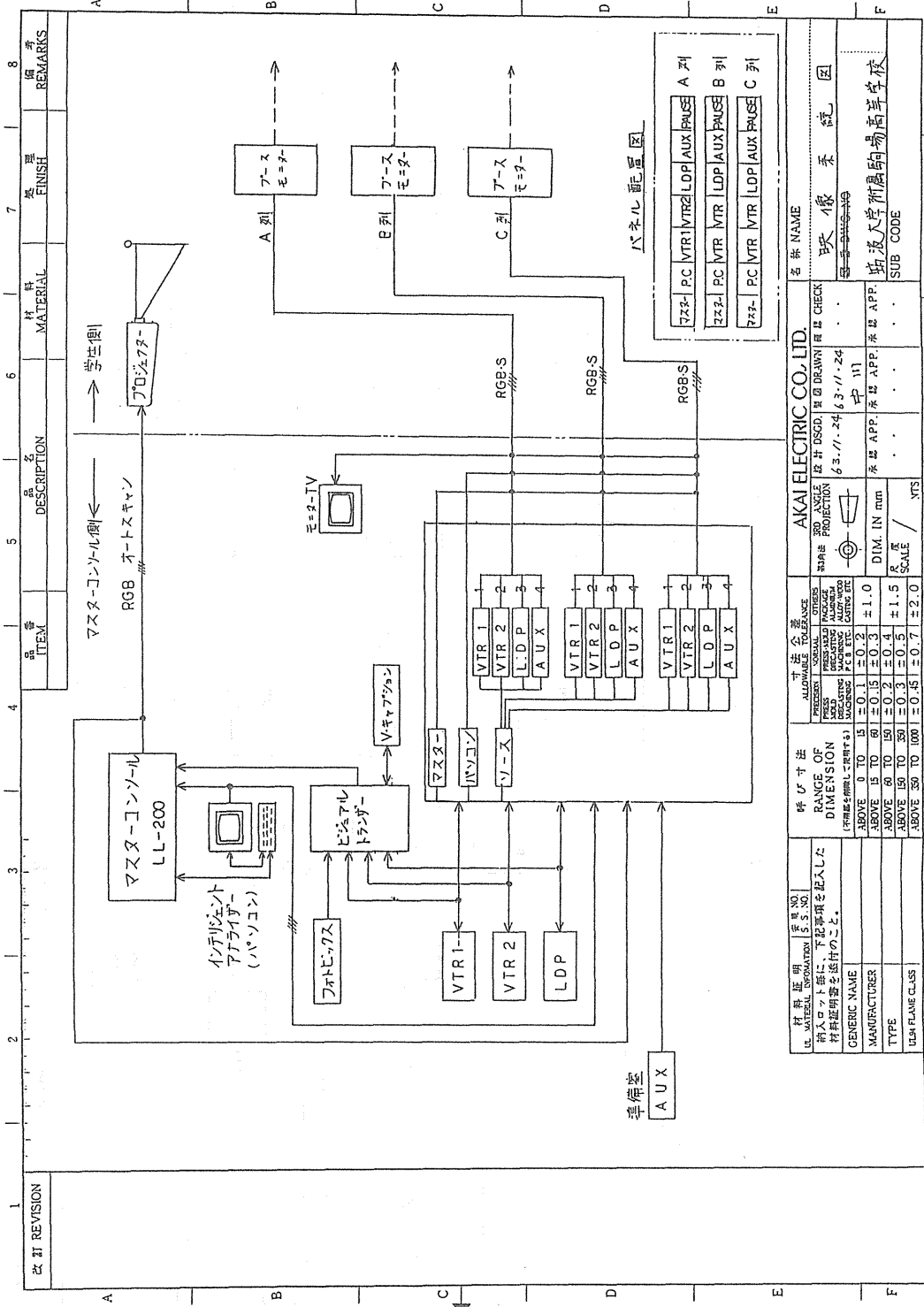
D	スカマ	5
C	警動器	6
B	エアコン	5
A	電動スリッパ	1
	名 称	個数



12		
11	天吊スベコ	6
10	ビデオプロジェクタ	1
9	生 徒 用 椅子	42
8	ア - ス T V	21
7	ア - ス プロジェクタ	42
6	ア - ス プロジェクタ	21
5	教 師 用 机	1
4	ビデオプロジェクタ	1
3	ビデオプロジェクタ	1
2	ビデオプロジェクタ	1
1	ビデオプロジェクタ	1
	名 称	個数

環境工学部附属高等学舎  
11 教室配置図

1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6
1	2	3	4	5	6



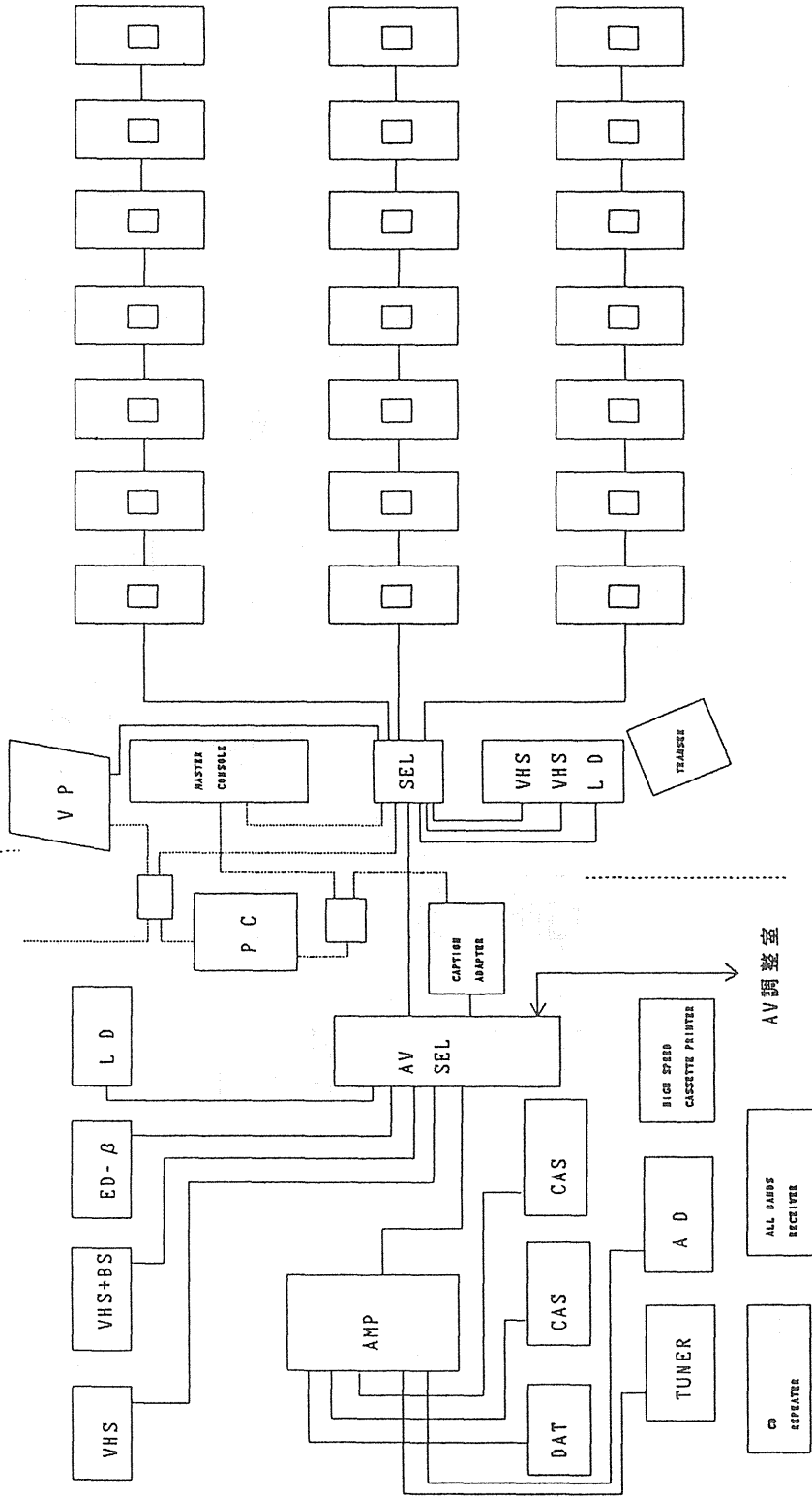
材料証明書 No. 15-301	呼び寸法 RANGE OF DIMENSION (FORME & MODEL-TRIPLE)	公差 TOLERANCE	名称 NAME
納入ロット毎に互換事項を記入した 材料証明書を添付のこと。	PRECISION SALES INDICATING SCALE	ALLOWABLE SALES INDICATING SCALE	AKAI ELECTRIC CO., LTD.
GENERIC NAME	ABOVE 0 TO 15 ABOVE 15 TO 60 ABOVE 60 TO 150 ABOVE 150 TO 350	OTHERS SPECIAL PRECISION INDICATING SCALE	設計 DS/D 図面 DRAWING 図面 CHECK 63/11/24 63/11/24 中 111
MANUFACTURER	ABOVE 350 TO 1000	± 1.0 ± 0.3 ± 0.2 ± 0.4	図名 映像 系統 図 品番 5-34-34-34
TYPE	SCALE	± 0.5 ± 0.3 ± 0.7 ± 2.0	所属 株式会社 映像 系統 図 所属 APP. 所属 APP. 所属 APP.
ITEM CLASS	ITEM CLASS		SUB CODE 所属 映像 系統 図 所属 APP. 所属 APP. 所属 APP.

LL教室機器構成図

LL準備室

AV調整室

LL教室



LL教室機器一覧(その1)

番	品名	製造会社名	規格	数量
	<< 調整部 >>			
1	マスターコンソール	AKAI	LL-100	1
2	同上取付卓	AKAI	1 に含む	1
3	パワーユニット	AKAI	1 に含む	1
4	マスターテープレコーダー	AKAI	LT-200	2
5	プリンター	AKAI	LT-501	1
6	教材提示装置	AKAI	LL-155	1
7	S-VHS ビデオカセットコーダー	VICTOR	SR-5050	1
8	S-VHS ビデオカセットコーダー	VICTOR	HV-V36	1
9	マルチディスクプレーヤ	SONY	MDP-911	1
10	モニターTV	VICTOR	特注	1
11	フォトピクス	TAMURON	TF60W	1
12	同上用エディター	TAMURON	FE-60W	1
13	同上用オートスライドフィーダーL	TAMURON	SF-12Z	1
14	ビデオ機器卓	AKAI	特注	2
15	コーナー置台	AKAI	1 4 に含む	
16	ヘッドセット	AKAI	LF-101	2
17	AVセレクトター	AKAI	特注	1
18	ビデオキャプション	FUTEX	FA-710	1
19	同上用ソフト	FUTEX	CAP-137S	1
20	ラボスピーカー	A&D	DS-500	1 組
21	パワーアンプ	A&D	DA-U11AV	1
22	教師用椅子	AKAI	LG-101	1
	<< プロジェクター部 >>			
23	ビデオプロジェクター	mitsubishi	LVP-1200X	1
24	プロジェクターリモコン	mitsubishi	2 5 に含む	
25	インターフェースアダプター	mitsubishi	VC-1200X	1
26	ビデオスクリーン	オーロラ	BE1-80M	1
27	暗幕スクリーンコントローラ	AKAI	特注	1
	<< 生徒部 >>			
28	ブーステープレコーダー	AKAI	LS-200AD	4 2
29	ヘッドセット	AKAI	LF-101	4 2
30	モニターTV	AKAI	LE-203	2 1
31	2 連ブース	AKAI	特注	2 1
32	椅子	AKAI	LG-201	4 2
33	天井スピーカー	AKAI	LE-502	6
34	映像分配器	AKAI	特注	2 2
	<< 準備室 >>			
35	E D β ビデオカセットコーダー	SONY	EDV-9000	1
36	S-VHS ビデオカセットコーダー	VICTOR	SR-5050	1

L I 教室機器一覧 (その2)

番	品名	製造会社名	規格	数量
37	” BS付	VICTOR	HRS-9000	1
38	エディティングコンローラ	VICTOR	RMV-1000	1
39	編集セクター		4 6 に含む	
40	漢字ビデオタイトラ	SONY	XV-J550	1
41	マルチディスクプレーヤー	SONY	DP-L1000	1
42	モニターTV (S端子付)	VICTOR	AV-M150S	2
43	デジタルオーディオテーブデッキ	A&D	D-9000	1
44	チューナー (FM/AM)	A&D	DA-F9000	1
45	オーディオアンプ	SONY	TA-AV990D	1
46	グラフィックイコライザー	A&D	DA-E950	1
47	マトリクススイッチャー	AKAI	特注	1
48	スピーカー	DIATONE	DS-33EXV	1組
49	ヘッドホン	A&D		2
50	ステレオマイクロホン	A&D	MU-201	1
51	マイクミキシングアンプ		4 3 に含む	
52	アナログプレーヤー	A&D	LT-930	1
53	ダブルカセットデッキ	A&D	GX-930	1
54	カセットデッキ	A&D	GX-Z9100	1
55	マルチバンドラジオ	SONY	ICF-2001D	1
56	高速カセットプリンター	SONY	CCP-110	1
57	A V マルチテーブル	AKAI	6 1 に含む	
58	C D リピーター	SONY	CDL-100	1
59	同上用ソフト (中1用)	SONY	CWS-571	1
60	タイマー	A&D	DC-138	1
61	機器収納ラック	AKAI	特注	1
	<<アナライザー>>			
62	アナライザー (ソフト付)	NEC, AKAI	AR-1	1

LL 教科本 — 55

分類	メディア	ソフト名	出版社名
88-1	V	On We Go	インターナショナル・ラーニング・システムズ
88-2	L	New Horizon 1 Laser Disc	バイオニア
88-3	L	New Horizon 2 Laser Disc	バイオニア
88-4	L	New Horizon 3 Laser Disc	バイオニア
88-5	V	口ぐせ発音特訓ビデオ	地球人村
88-6	A	エレメンタリーLL英語教本	大修館
88-7	V	フレッシュLLビデオ	大修館
88-8	Vc	マイゼミストリートホームビデオ Learning about letters	日本出版貿易
88-9	Vc	Getting Ready to Read	日本出版貿易
88-10	Vc	I'm Glad I'm Me.	日本出版貿易
88-11	Vc	Getting Ready for school	日本出版貿易
88-12	Vc	Learning to Add and Subtract	日本出版貿易
88-13	Vc	Big Bird's Story time	日本出版貿易
88-14	V	About Britain	マクミラン
88-15	V	TV shot U.S.A. vol. 1	ジエムコ
88-16	V	TV shot U.S.A. vol. 2	ジエムコ
88-17	V	TV shot U.S.A. Vol. 3	ジエムコ
88-18	A	英語ヒアリング 実力完成問題集	開拓社
88-19	A	ニュージュニアLL英語教本	大修館
88-20	A	Joyful A-0 English	第一学習社
88-21	A	Universal A-0 English	第一学習社
88-22	A	General English Test	Sony
88-23	A	Basics in Listening	Lingual House 320-4170
88-24	A	Strategies in Listening	Lingual House 320-4170
88-25	A	Listening in the Real World	Lingual House 320-4170
88-26	A	Listen for It	Oxford University Press
88-27	A	Better Listening 1	Oxford University Press
88-28	A	Better Listening 2	Oxford University Press
88-29	A	Better Listening 3	Oxford University Press
88-30	A	Listening Fluency	Seido
88-31	A	Dictation Fluency	Seido
88-32	A	Active Listening	Seido
88-33	A	On Course	Oxford University Press
88-34	A	East West 1	Oxford University Press
88-35	A	East West 2	Oxford University Press
88-36	A	Whaddaya say?	Language Service
88-37	A	Listen, Laugh and Listen	Seibido
88-38	A	Short Short for Listening	New Current International
88-39	A		Junior Course Intermediate Course
88-40	A	Just Give Us 10 Minutes	New Current International
88-41	A	Multi Practice in Listening	New Current International
88-42	A	ヒアリングの基礎演習	金星堂
88-43	A	高校生のヒアリング演習 (H S Listening Practice vol.1)	New Current International
88-44	A	はじめての英語発音	Seido
88-45	A	ヒアリングの演習	語研
88-46	A	リダクションの演習	語研
88-47	A	英語版連想クイズ(正)	マクグロウ・ヒル
88-48	A	英語版連想クイズ(続)	マクグロウ・ヒル
88-49	A	Sony Aural English Test	Sony
88-50	Lc	Top Gun	PARAMOUNT
88-51	Lc	Back to the Future	MCA HOME VIDEO
88-52	Lc	Star Wars -Return of Jedi	CBS/FOX VIDEO
88-53	Lc	Star Wars -The Empire Strikes Back	CBS/FOX VIDEO
88-54	L	The Sound of Music	CBS/FOX VIDEO
88-55	L	My Fair Lady	PIONEER
88-56	L	The Wiz	PIONEER
88-57	L	Roman Holiday	PIONEER

結果的には、本校 LL 教室・LL 準備室は普通の LL 教室として考えられる仕様の他に次のような特別仕様を持つものとなった。

1. PC-9801をアナライザーとして使用し、データのやりとりをマスターコンソールとの間で行える。また、データをディスクレットに落とすことができる。
2. PC-9801の RGB 映像をビデオプロジェクターとブースのモニターに送ることができる。
3. AV 調整室からの RGB 映像をビデオプロジェクターに送ることができる。  
PC-9801の RGB 映像を AV 調整室に送ることができる。
4. LL 教室の VTR (2 台), LD, 教材提示装置, マスターコンソールからの映像・音声情報および、準備室の機器の映像・音声情報を LL 教室のブースの 3 つの島に最大 3 系統独立して別個に送ることができる。
5. ビデオキャプションアダプターにより、英語の字幕を写すことができる。また、PC-9801と RS232C コードで接続してあるので、キャプションをプリンターで印字でき、またディスクレットにも落とすことができる。
6. AV 調整室の送出架の機器をリモートコントロールで操作できる。
7. BS・VHF・UHF・FM の受信ができる。
8. 暗幕・照明・プロジェクタースクリーンの操作を手元で行うことができる。
9. LL 準備室で映像・音声情報の簡単な編集ができる。

### § 3 授業実践から

上記のようなすばらしい LL 機器を導入して、初年度 (1989 年度) にどのような形で実践が行われたか、簡単に報告したい。

ただし、初年度に担当した専任教官 4 名の内 2 名が転出したので、残る 2 名の報告となる。

#### (1) 中学 1・2 年生 (加藤担当)

筆者は、中 1・中 2 の LL の授業を週 1 時間づつ担当した。ただし、当初 1 年間のはずが、事情によって 1・2 学期だけしか担当できなくなったため、その期間について報告する。なお、この期間の詳しい実践報告は、別の機会に行う予定である。

まず、中学 1 年についてであるが、教科書とはまったく別に、独立して LL の時間として 1 時間確保できたので、1・2 学期は発音指導を中心に据えて実施した。

発音指導については、大修館の「LL 教本 英語発音ベーシックコース」を使用した。この教材には、毎時間ごとに発音を確認するためのテストがついているので、毎回、アナライザーで記録をとり、ディスクレットにもデータを落としてある。分析は、別の機会の報告にゆだねるが、概ね 90% の正答率を維持できたし、生徒は、ゲーム感覚で楽しく取り組んでいた。

発音指導で 1 時間のうち 30~40 分費やされるが、残った時間は、生の英語をたくさん聞かせるために、TV から録画しておいた「Kid's English」を編集して見せたり、他の、ビデオ教材を使

用した。ビデオ教材で特に中1用として、効果的なものは、地球人村から発売されている“F. I. A. Rhythm Training”であった。この教材は、英語のリズムを体で生徒に覚えさせるもので、入門期に使用する教材として最適であると考えられる。

中学2年については、教材として、大修館の「エレメンタリー LL 教本」を使用した。この教材はLL教材として古典的なものであるが、なるべく中学2年の教科書のレベルを大幅に越えないように最も易しいものを選んだ。この教材は、短い英文を聞かせて、内容をAural Checkで確認した後、演習させる形式をとっている。しかし、未修の文法項目もかなり出てくるので、11月のL. L. A.の研究会で研究授業を行う（§5（1）参照）までは、文法事項を説明し、演習を行ってから、最後に英文を聞かせてAural Checkを行った。このテストは、選択肢を選ぶ形式なので、全てアナライザーを使用して行った。結果のデータは、ディスクに落としてある。生徒の理解度はほぼ90%を越えており、11月の時点まで1問も間違えていないという生徒も複数いた。なお、11月の研究会のうちに、この教材の著者である筑波大学の浅野博先生を助言者をお願いしたが、先生からは、授業の進め方について、教材の本来の順序で行うように助言をいただいた。すなわち、英文を聞いてから、Aural Checkを行い、演習に進むようにということである。この後、この順序で授業を行うようにしたが、アナライザーの分析では、正答率は以前より有為さが認められるほど低下していないことが分かった。

この教材以外に、いろいろな、ビデオ教材を使用した。中学1年にも使用した“F. I. A. Rhythm Training”が効果的であった。しかし、中学2年で「照れ」が出てくるので、生徒によっては、いやがるものもあり、中学1年のように天真爛漫に練習を行えない部分もあった。

最後に、初めてLLを授業に使用して驚いたことは、生徒が教材を繰り返し声に出して練習しているところをモニターしていると、3回目の繰り返しの時には、英語のリズムがかなり身についているということである。発音の面ではまだまだ学ばなくてはならない生徒も多いが、中学の時から、LLを利用している生徒達の将来が楽しみである。

## （2）中学2年生（久保野担当）

英語学習におけるLL授業の役割は、スポーツ（例えばテニス）に例えてみるとわかりやすい。外国人（例えばAET）とのやりとりが「試合」だとすれば、LL学習はテニスを例にとるとフォア・バックのストローク、ボレー、サーブ、サーブ・レシーブ等多球練習（球出しをしてもらった1本打ち）によく似ている。

3学期（1990年1月－3月）だけ中学2年生（42期生）のLL授業を担当することになった。中学・高校の入試期間の自主学習のために実際の授業は各クラスとも7時間と非常に少なかった。しかし担任学年のため、その他に週3時間検定教科書（New Crown）を中心とした授業を行っていたので、「週4時間担当する英語の授業のうちの1時間をLL教室での授業に充てる」という前提で他の授業と有機的に関連づけるように工夫しながらLL授業に臨めたのは幸運であった。



基本的な授業のパターンは次に示すような3本の柱から構成されている。

## 0. Introduction—Warm Up

- 生徒への指示（出欠確認，忘れ物のチェック，テープの準備，ヘッドセットの着脱等）は原則として全て簡単な英語で行う。
- 身近な出来事（大雪，ローリングストーンズのコンサート，学校行事等）を題材にした話をし，関連した質問をする。
- この間はヘッドセットを付けずに全て肉声で普通教室を同様に行う。

## 1. 個々の音の発音練習（単語→句→文）——アクセントとリズム・音声変化を中心に——

〈教材〉①「LL教本 英語発音ベーシックコース」島岡 丘（大修館）（資料1参照）

②「はじめての英語発音」（セイドー外国語研究所）より抜粋（資料2参照）

③「英語ヒアリング 実力完成問題集」島岡 丘（開拓社）より抜粋（資料3参照）

- 発音練習をスポーツとしてとらえ，「理論よりもコツ」を重点に指導。英語のリズムを強く意識（リズム・トレーニング）させながら，短くなる音，弱くなる（消える）音に慣れさせる。
- 英語らしいリズム（強弱・長短）で発音するコツがわかると，聞きとり能力も向上することを体験させる。
- 詳しくは「1990年度 語学教育研究所（語研）研究大会」（10月28日・東京外国語大学）での研究発表『AV機器の効果的な利用法(1)』を参照のこと。（2⑤も同様）。（資料4参照）

## 2. Music Transcription ——ブレイク+α——

〈選曲の基準〉ロック・ポップスのヒット曲（新旧問わず有名な名曲）の中から，内容，表現（語句，文法事項等）で関連のある物を選ぶ。（資料5参照）

〈手順〉①その曲やアーティストに関する情報を簡単な英語で話し，生徒の理解を確認する。

②曲を流し（音声テープ，ビデオ・クリップ等），個々のブースのテープに録音させる。（ヘッド・セットは外す）

③歌詞のプリントを配り，個々にプレイバックしながら穴うめをさせる。

④解答を示す実物提示装置（データ・ビューア）を利用。内容を簡単に解説する。

Rhyming Words（韻をふんだ語）を発見させる。

⑤一部分を選び歌の練習をする。最初はメロディーを意識せず，手拍子のリズムにあわせて言葉をのせる。徐々にメロディーをつけていく。

## 3. 対話文教材を用いた「発話力・聴覚力」の訓練

〈教材〉「エレメンタリーLL 英語教本」浅野 博他（大修館）

・LL 前任者から引き継いだ教材

・Aural Check (対話内容についての確認テスト, 二者択一・5問) の解答データをアナライザーを用いて集計し, コンピューターに記録したがそれだけにとどまり, アナライザーがなければできないようなデータの分析・活用は行えなかった。

→アナライザーを「効果的に活用」したとは言い難い

以上の3本(4本)の柱で50分間(実質45分間)の授業を組み立てた。1(発音練習)と3(文レベルの発話練習)の個人練習を教師側で個別にモニターし, 全体に共通するトラブル・スポットは, 作業を中断させて全員に対して再度強調し復習・練習した。個々の生徒に特有な誤り等はヘッドセットを通じた相互通話(inter com)機能を通して対応した。

最後に評価(テスト)について考えたい。

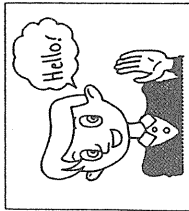
「聴覚力」の測定は既存のテストによって可成りの部分測定可能であろう。しかし, これはLLがなくとも, アナライザーがなくとも測定可能であろう。しかし, 「発話能力」の測定は個別にインタビューでも行わない限り極めて困難である。そのうち「英語らしいリズムで発音できる能力」に限定して考えてみたい。従来から筆記試験で「発音・アクセント」の知識は問われて来た。しかしその問題の得点と実際の発音との間に必ずしも相関関係が見出せないのは周知の事実である。これは「<sup>ウツク</sup>畳の上の水練」(水泳に関する知識があることが, 必ずしも泳げることを意味しない)と平行的である。泳ぐ力は泳がせてみなければわからない。

「生徒人数分のテープレコーダー(録音機)」としてのLL教室の機能がこの問題に対する解決の糸口となってくれるのではないだろうか。

## 「アクセントとリズム」

## 1 リズムパターン(1)：弱音＋強音

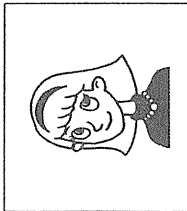
発音練習



Hello.  
Of course.  
Again.  
Come back.  
Sit down.  
New York

## 2 リズムパターン(2)：強音＋弱音

発音練習



Susan  
Help me, Susan.  
Take it.  
Join us.  
Dinner.  
Busy?

## 3 リズムパターン(3)：弱音＋強音＋弱音

発音練習



Good morning.  
Good evening.  
Do you like her?  
Be quiet.

## 4 リズムパターン(4)：強音＋弱音＋強音

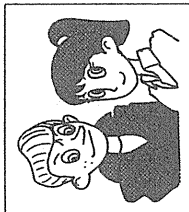
発音練習



Put it there.  
Show me now.  
Look at that.  
Make it quick.  
Rock'n Roll  
East and West

## 5 リズムパターン(5)：強音＋弱音...＋強音＋弱音...

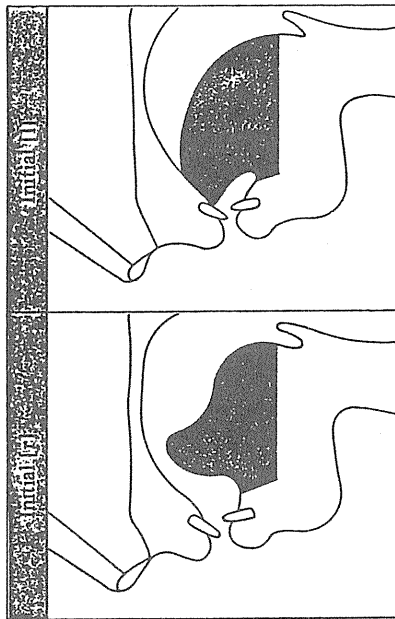
発音練習



Jack and Betty  
Go and get it.  
Make her happy.  
Call me Andy.  
Can you find 'im?  
Take it easy.  
growth and development

〔r〕と〔l〕の発音

PRONUNCIATION OF [r] AND [l] (CONTINUED)



〔r〕の図を見てください。唇をまるめ、舌を後ろに引きます。繰り返してください。

[ri: - rei - ra - rou - ru:]

次の単語を言ってください。

1. read
2. rate
3. rack
4. road
5. room

〔l〕の図を見てください。舌の前方を歯茎に押しつけます。繰り返してください。

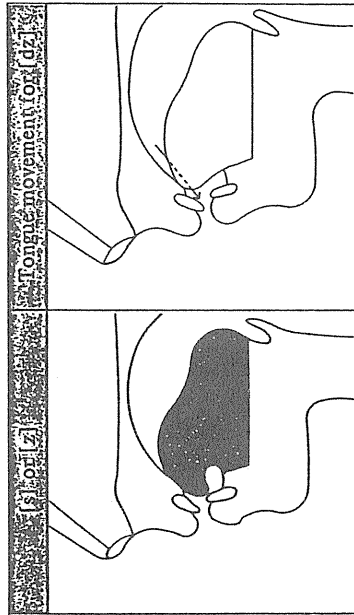
[li: - lei - la - lou - lu:]

次の単語を言ってください。

1. lead
2. late
3. lack
4. load
5. loom

〔z〕と〔dz〕の比較

[z] CONTRASTED WITH [dz] AS IN KNEES - NEEDS



上図は〔ts〕、〔dz〕における舌の動きを示しています。日本人にとって〔ts〕は比較的簡単な音ですが、〔dz〕は発音するにも聞きわけにも難しい音です。〔dz〕と〔z〕の違いは、〔dz〕が閉鎖音であるのに対し、〔z〕は継続音であるということです。〔dz〕を発音する場合、舌は最初〔d〕の位置にあります。続いて〔z〕が発音される時に、舌の中央に溝ができ、その溝を通して息が流出します。上図の矢印は〔dz〕の発音の際に息が舌の溝を通して流出する様子を示したものです。

〔dz〕で終る言葉の練習。

1. beads
2. needs
3. kids
4. maids
5. beds
6. birds
7. words
8. friends
9. cards

次に、〔z〕と〔dz〕を比較する練習。

1. knees - needs
2. sees - seeds
3. bees - beads
4. cars - cards
5. rose - roads
6. guys - guides

(資料3)

## SOUND CHANGE (liaison)

1. { What are you going to be?  
Perhaps I'm going to be a lawyer.
2. { Is this call important, I mean, in her favor?  
Yes, very.
3. { What did you do on a weekend?  
I read as many as four books.

聞き取り上の  
注意点

音の連続によって、発音が相互にまたは一方が他方に影響するため、聞き取りの練習が必要である。

1. What are のように続くので、t が [d] のように聞こえる。
2. going to が続くと goin' to, さらに n と t が結合して t が脱落する。さらに goin' の oi が縮まって、全体として gonna のように聞こえる。
3. in her favor は her の h が脱落し、in'er favor と発音されるので in our favor と区別しにくい。his, him などの h も脱落することが多い。
4. in の [n] と the の [ð] と連続すると、歯間鼻音となって th [ð] はほとんど聞こえない。
5. [p, t, k; b, d, g] の破裂音が二つ連続すると、前の破裂音はほとんど聞こえない。What did の連続では What の t はほとんど聞こえない。
6. Did you は [d] と [j] が一緒になると [dʒ] の音に聞こえる。

テープを聞き、読まれている語句または文はどちらであるか答えなさい。  
(それぞれ4通りに続けて1回読みます。ブザーに続いてもう1回読みます。)

1. { a. in the world ( , , , )  
b. in a word
2. { a. They are my friends there. ( , , , )  
b. There are my friends there.
3. { a. It would be wonderful. ( , , , )  
b. That would be wonderful.
4. { a. Roosevelt Street ( , , , )  
b. Norfolk Street
5. { a. I gave him the book. ( , , , )  
b. I gave her the book.
6. { a. gently ( , , , )  
b. gentry
7. { a. weightless ( , , , )  
b. waitress
8. { a. Shall we go and eat? ( , , , )  
b. Shall we go eat?
9. { a. He is on it. ( , , , )  
b. He is at it.
10. { a. Let's type it out. ( , , , )  
b. Let's type them out.

協議会：第 4 部会

「A V 機器の効果的な利用法 (1)」  
— リズム・トレーニングを中心に —

筑波大学付属駒場中・高等学校 久保野 雅史

0. 学校(筑駒)の現状

- ・ 中高一貫の男子校 (中学生は全員高校に進学)
- ・ 生徒数 { 中学 約300名 (約40名×3クラス×3学年)  
          { 高校 約480名 (約40名×4クラス×3学年)  
              ※高校から約40名入学
- ・ 英語科教員 7名 (中高の両方を担当)
- ・ 1989年 L L 教室設置 (ビデオ機器の充実)
- ・ 1990年 A E T の導入

1. A V 機器を効果的に利用するには？

— 各機器の操作上の工夫の他に —

(1) 《ハード面》

「教師(人間)にしかできないこと」と「機械にしかできないこと」

を区別する視点

- ① 本当に A V 機器は必要なのか？  
— 必要な状況に機器の使用場面を限定する —
- ② テープレコーダーは単なる「再生装置」？  
— 機器の使用目的を明確にする —  
→ 評価の場面への活用

(2) 《ソフト面》

① 教材選定の基準

- ・ 「聞く」「話す」のどちらを主なターゲットとするのか？
- ・ 教師が示すよりも効果が期待できるか？
- ② 「教材作成者の目指すもの」とその検討  
・ 教師の役割—自分なりの加工、重点化
- ③ どの場面で用いるのか？—導入/仕上げ

2. リズム・トレーニング (別刷りの資料参照)

(1) 理論よりコツ — 教師の役割 (必要性・出番)

(2) 音楽・体育の指導に近づける

- ① リズム譜のイメージ  
・ 小節の区切り方  
・ アクセントのおき方
- ② 単語レベル → 文のレベル  
  { base/vase  
  { rose/roads
- ③ 発音のコツ → 聞き取りのコツ  
— 言えないものは聞こえない？ —
- ④ 手拍子とリズムボックス — どの場面に適するか？ —
- ⑤ 英語の歌の指導 — なぜ英語に聞こえないのか？ —  
リズム → メロディー

3. 教材の紹介・実演

4. 今後の展望

BLOWIN' IN THE WIND (written by Bob Dylan)  
/ Peter, Paul & Mary (1963)

How many ( ) must a man walk down  
before ~~they~~ call him a swain?  
How many ( ) must a white dove sail  
before she sleeps in the sand?  
How many ( ) must the cannonballs fly  
before they're forever landed?  
\* { The answer, my friend, is blowin' in the wind.  
The answer is blowin' in the wind.  
How many ( ) must a mountain exist  
before it is washed to the sea?  
How many years ( ) some people exist  
before they're allowed to be free?  
How many times can a man turn his ( )  
and pretend that he just doesn't see?

Repeat \*

How many times must a man ( ) up  
before he can see the sky?  
How many ( ) must one man have  
before he can hear people say?

How many ( ) will it take till he knows  
that too many people have decided?

Repeat \*

The answer is blowing in the wind.

現在完了形 (have/has+過去分詞) の形で表し、過去の出来事  
や状態が、何らかの点で現在とつながりをもっていることを表す用  
法である。過去進行形も過去の出来事だけを並べる用法である  
ことと区別しなければならない。

a. Bill had a car accident. (過去)  
b. Bill has had a car accident. (現在完了)  
上の2つの文を比較すると、a, bともに「ビルが車の事故にあ  
った」ことを述べているが、aの文が単に「車の事故にあった」と  
いう過去の出来事を述べているだけで、現在とのつながりについて  
は触れていないのに対して、bの文は「事故にあった(だから、今  
入院中だ)」というような意味になり、過去の出来事が現在と何ら  
かのつながりをもっていることを理解することが大切である。



次の例では、その「つながり」は[ ]内に示してある。

- ① I have cleaned my shoes. (私は靴を洗った。) [今はきれいだ]
- ② He has been ill for a week. (彼は1週間前から病中だ。) [今も直っていない]
- ③ She has often visited Canada. (彼女は向來もカナダへ行っていたことがある。) [だから、よく知っている]

## § 4 LL と語学部活動

本校には、目下、中学に語学部というものが存在している。名前は語学部であるが、実際は「英語部」と言っても良く、英語の自主的な活動に重点を置いている。

語学部活動について特徴的なことは、学年の進行に応じて、語学力の差が相当に顕著であると言うことであり、日常の活動においては、あまりチーム・ワークに馴染まないと言うことである。

スポーツ・クラブのように、団体競技の勝・敗を争うことは比較的にまれであると言うことと、学年が異ると学力も相当に異って来ると言う理由によって、チーム・プレイをする場が、比較的少ないと言えよう。

そこで、語学部の活動を、大まかに、二種類に分けている。

1つは、顧問である私が、学年別に、部員と対応して、学年別の指導をしている。もう1つは、最上級生である中学3年生に、下級生の、中1、中2の生徒達の面倒を見させると言うことである。

LLが導入される以前は、私の指導に関しては、学年毎に、異った level の英語の本を読んだり、異った level のテープ教材を使用したりした。又、中3生による指導については、中3生が下級生を指導しやすいような教材を与えて行かせていた。

LLが導入されたので、今年4月から、私の指導にLLを使い始めたが、LLは大変に効率の良い反面、ややもすると、at home な雰囲気欠ける面が生ずることがあるのでは無いかと思える。

英語の正規の授業と違って、人間的接触を十分に計ることを目的とする、自主的なクラブ活動においては、教師が control する LL は導入に少し無理が生ずるように思える。人数もかなり限られているので、どうしてもLLを使わなければならないという量的必然性は薄いように思われる。

では、語学部活動にLLは必要ないのだろうか。これについては、次のように考えている。

本来自主活動的要素を持った部活動であるので、LLに関して言えば、Master control を誰が持つかと言うことが大切な point と思われる。つまり、中学3年生の well-motivated students に対して、徹底的にLLの teacher 側の操作の仕方を覚え込ませて、生徒のリーダーにLL学習の master control を持たせると言う事が大切な側面と思える。

こうする事によって、指導する側（中3の生徒）と指導される側（中1・中2の生徒）との間に、信頼・尊敬と言う望ましい心理的な土壌が出来るような気がする。

生徒の操作によるLLの事故を恐れているのでは無く、リーダーの生徒に徹底的に機会の操作を教え込むことによって、技術的問題と同時に、心理的問題が解決するように思える。

むしろ、教師の役割はLLを操作する中3の生徒の指導に当り、かつ、一般の生徒に対しては、学年別の指導をしながら、常に個別の指導が出来るよう心理的側面に重点を置いた方がよいと思



える。

語学部活動の顧問としての教師の役割は、むしろソフト教材の整備，上級生が下級生を指導する為のハード・ウェアの整備，そして、自らは個々の生徒の個々の欲求に対応出来るよう、むしろ、機械を通した場合でも、常に、(i) 生徒の顔を見て、(ii) 常に肉声にて、直接話しかける環境の方が良いのでは無いかと思える。

LLは万能では無いが、また、同時にLLはかなり有力な武器ともなる。今後、このような考え方で実験を重ねて行きたいと願っている。



# 1989年度 LLA 関東支部(中学校)第4回 研究会

(主催) } LLA 中学英語教育部会  
筑波大学附属駒場中・高等学校

○ 日時 1989年 11月 21日 (火) 2:00 ~ 5:00 p.m.

○ 会場 筑波大学附属駒場中・高等学校

〒154 世田谷区池尻 4-7-1  
(03) 411-8521 (代)

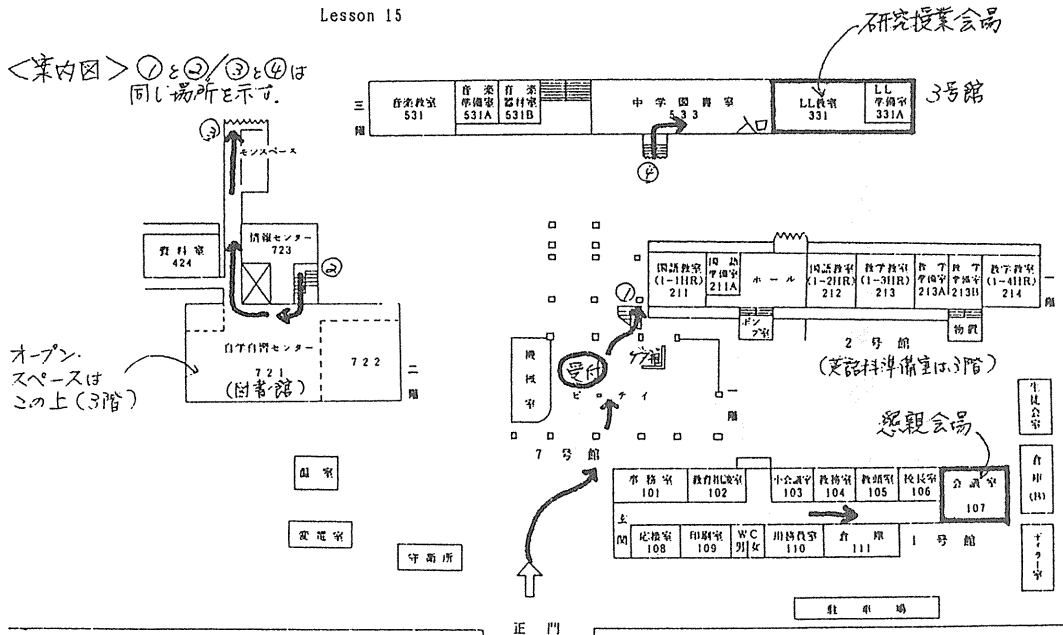
	13:00	14:10	15:00	16:00	17:00
<時程>	受付	研究授業 (中学2-B)	LL, AV 等の 活用説明 コンピュータ見学	研究協議	懇親会 (会費 ¥1,500)
<場所>	ビロoyer (7号館下)	LL教室 (3号館3階)		オープンスペース (7号館3階)	大会議室 (1号館1階)

↓  
中学図書室でお待ち下さい

<研究授業> 6校時 14:10 ~ 15:00 (50分間)

- ① 指導助言者 浅野 博 教授 (筑波大学)
- ② 授業者 加藤裕司 教諭
- ③ テーマ 「コンピュータによるアナライザーを利用した授業」
- ④ 対象 2年B組 (男子40名)
- ⑤ 使用教科書 エレメンタリーLL英語教本(大修館)  
Lesson 15

<案内図> ①と②/③と④は  
同じ場所を示す。



Teaching Plan

Instructor: Yuji Kato

2. LL practice  
(1) Listening and recording  
(2) Listening  
3. 'Aural check' (checked by the analyzer)  
4. Dialogue practice  
5. Consolidation  
(6. Rhythm training)

I. Date: Tuesday, November 21, 1989

II. Class: 2-B, University of Tsukuba Junior High School at Komaba

III. Textbook: *Elementary LL English Course*

IV. Aim of this lesson:

To familiarize the students with the expressions which refer to the events of the future

V. Item to be stressed in this period:

The present progressive referring to a definite arrangement in the near future  
e.g. I hear you are going to Europe.

VI. Procedure:

I. Presentation of new materials

(1) Grammatical point

I'm going to Europe.

(2) Expressions

I hear you are building a new house.

That sounds exciting.

(3) New words

abroad, Switzerland, straight, forgot

## 15 Going on a Trip

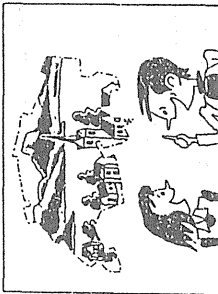
**15-1** Review **15-3** の正名をさしなさい。聞いて空所を埋め、次に、あとについて書いて下さい。

- \_\_\_\_\_ is going \_\_\_\_\_.
- George is going to \_\_\_\_\_.
- George is leaving on \_\_\_\_\_ week.
- George and his mother are going \_\_\_\_\_ to the \_\_\_\_\_.
- George and his mother are going \_\_\_\_\_.

**15-2** Basic Dialogues あとについて書いて下さい。

- A: I'm going to Europe.  
B: That sounds exciting.
- A: When will you leave?  
B: Perhaps next week.
- A: Are you ready to go?  
B: Yes, I am.

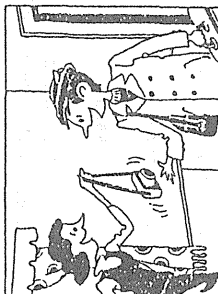
**15-2** Conversation 絵を見ながら、対話をよく聞きなさい。



ジョージは遠くへ旅行することになりました。出発の日、空港まで何に乗って行くのでしょうか？

Words and Phrases

- あとについて書いて下さい。  
abroad  
Switzerland  
straight  
forgot



**15-3** Aural Check 対話の内容について質問します。聞いてA、B 2つの答えが聞こえてきますから、正しい答えの番号をOで囲みなさい。

1	2	3	4	5
A	A	A	A	A
B	B	B	B	B

**15-3** Pattern Drills 聞こえてくる指示に従って練習しなさい。

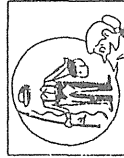
- I hear you're going abroad.
  - leave for Europe
  - travel around the world
  - move to the country
  - build a new house
  - open a new shop
- We'll drive straight to the airport.
  - walk... the next corner
  - run... the bus stop
  - fly... Chicago
  - go... back... our hometown
  - swim... back... the shore

**15-3** Dialogue Practice 聞こえてくる指示に従って、対話の練習をしなさい。



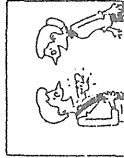
A: I'm going fishing in Alaska.

B: \_\_\_\_\_  
それはどこだね。



A: I'll leave in a week.

B: \_\_\_\_\_  
何日は全部何んだの？



A: Yes, I'm quite ready.

B: \_\_\_\_\_  
ご準備だね。

15 Going on a Trip (10'00)

15-1 Basic Dialogues (30")

Listen and repeat:

1. A: I'm going to Europe. #
- B: That sounds exciting. #
2. A: When will you leave? #
- B: Perhaps next week. #
3. A: Are you ready to go? #
- B: Yes, I am. #

15-2 Conversation (2'00)

Listen:

- J : I hear you're going abroad.  
C : Yes. I'm going to Switzerland.  
J : That sounds exciting. When will you leave?  
C : On Saturday next week.

Mrs.B: George, I think we'll drive straight to the airport.

C : All right. I've got everything.

Mrs.B: You forgot your camera!

G : Oh, thanks, Mother. Now, I'm ready.

Words and Phrases

Listen and repeat:

- abroad # (x2), Switzerland # (x2), straight # (x2), forgot # (x2)

Listen again:

--- repeated rather slow ---

Listen again:

--- repeated ---

15-3 Aural Check (2'00)

Listen and choose A or B:

1. Who is going abroad, Jane or George? (x2)
  - a) Jane is going abroad. (x2)
  - b) George is going abroad. (x2)
2. Where is George going? (x2)
  - a) He's going to Switzerland. (x2)
  - b) He's going to Finland. (x2)
3. When is he leaving for Switzerland? (x2)
  - a) He's leaving on Thursday next week. (x2)
  - b) He's leaving on Saturday next week. (x2)
4. Are they going straight to the airport? (x2)
  - a) Yes, they are. (x2)
  - b) No, they aren't. (x2)
5. How are they going to the airport? (x2)
  - a) They are going by car. (x2)
  - b) They are going by bus. (x2)

15-4 Review (1'45")

Listen:

--- 15-2 repeated ---

Listen and repeat:

1. (George) is going (abroad). # (x2)
2. George is going to (Switzerland). # (x2)
3. George is leaving on (Saturday) (next) week. # (x2)
4. George and his mother are going (straight) to the (airport).
5. George and his mother are going (by) (car). # (x2) # (x2)

15-5 Pattern Drills (2'00)

1. Listen:

I hear you're going abroad. (x2)

Now substitute.

- 1) leave for Europe @ I hear you're leaving for Europe. #
- 2) travel around the world. # I hear you're traveling around the world. #
- 3) move to the country @ I hear you're moving to the country. #
- 4) build a new house @ I hear you're building a new house. #
- 5) open a new shop @ I hear you're opening a new shop. #

2. Listen:

We'll drive straight to the airport. (x2)

Now substitute:

- 1) walk ... the next corner. # We'll walk straight to the next corner. #
- 2) run ... the bus stop @ We'll run straight to the bus stop. #
- 3) fly ... Chicago @ We'll fly straight to Chicago. #
- 4) go ... back ... our hometown. # We'll go straight back to our hometown. #
- 5) swim ... back ... the shore @ We'll swim straight back to the shore. #

15-6 Dialogue Practice (1'45")

Listen:

- A: I'm going fishing in Alaska.  
B: (That sounds exciting.)  
A: I'll leave in a week.  
B: (Have you got everything ready?)  
A: Yes. I'm quite ready.  
B: (Have a nice trip.)

Now repeat: --- repeated with each pause ---

Take the part of A: --- B repeated ---

Take the part of B: --- A repeated ---

Listen and repeat: --- repeated with each pause ---

アナライザによるテスト結果 (L1~L13)

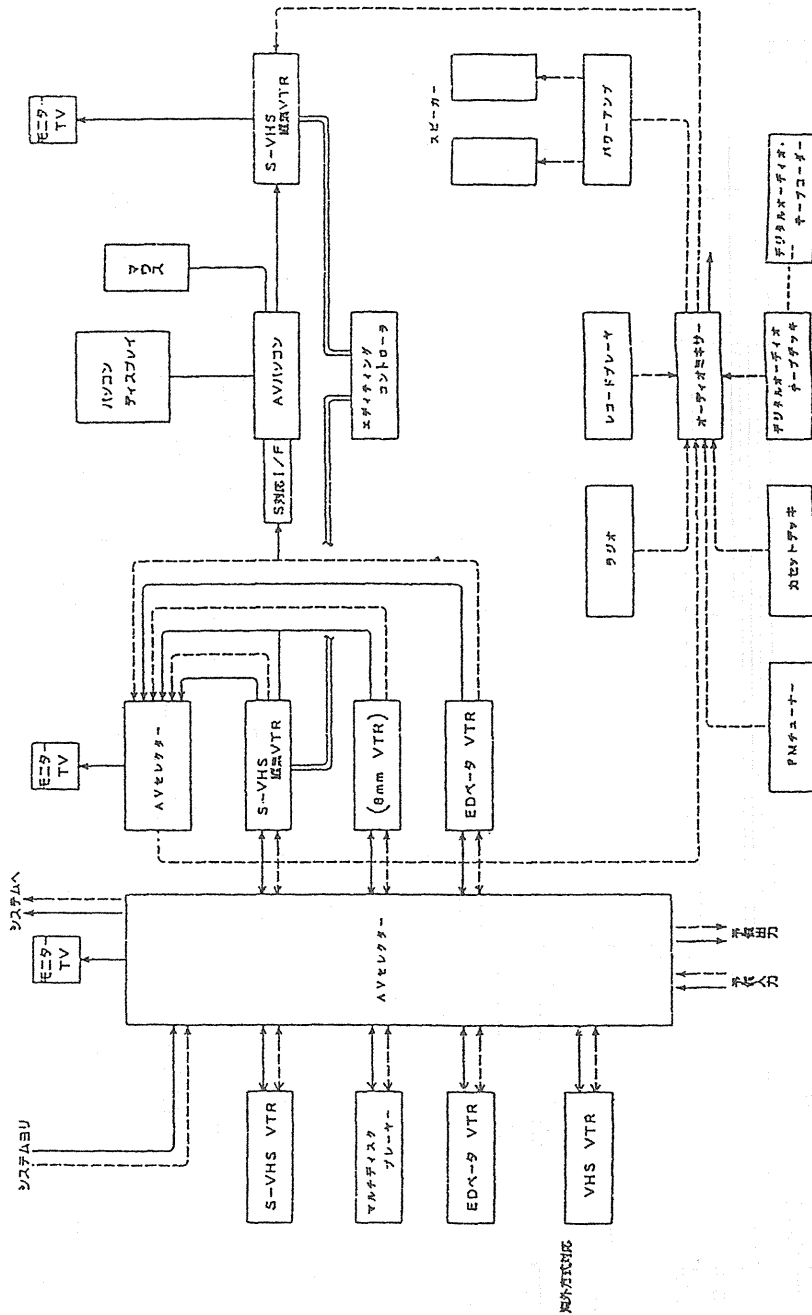
1=L1B                    4=L4B2                    7=L7B                    10=L10B                    13=L13B  
 2=L2B                    5=L5B                    8=L8B                    11=L11B  
 3=L3B                    6=L6B                    9=L9B                    12=L12B

S.N.:	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	MARK
1#:	10	10	10	14	10	10	10	16	10	8	10	10	10	138
2#:	10	10	10	16	10	10	10	16	10	10	10	12	10	144
3#:	8	10	10	14	10	10	10	16	10	10	10	16	10	144
4#:	10	10	10	12	10	10	10	16	10	10	10	14	10	142
5#:	10	10	10	16	10	6	10	16	10	10	10	14	10	142
6#:	10	10	10	14	10	10	10	10	10	10	10	12	10	136
7#:	10	10	10	14	10	10	10	16	10	10	10	16	10	146
8#:	10	10	10	16	10	10	10	16	10	10	10	12	10	144
9#:	10	10	10	16	10	10	10	16	10	10	0	16	0	128
10#:	10	10	10	14	10	10	10	16	10	10	10	14	10	144
11#:	10	10	10	12	10	10	10	16	10	10	8	16	0	132
12#:	10	10	10	16	10	8	10	16	10	10	0	16	10	136
13#:	10	10	10	14	10	8	10	14	10	10	10	16	10	142
14#:	8	10	10	16	10	10	10	16	10	10	10	16	10	146
15#:	10	10	10	12	8	10	10	16	10	10	10	16	10	142
16#:	10	10	10	14	10	10	10	16	10	10	10	16	10	146
17#:	8	8	10	14	10	10	10	16	10	10	10	16	10	142
18#:	10	10	10	16	10	10	10	16	8	10	10	16	10	146
19#:	8	10	10	16	10	10	10	16	10	10	10	16	10	146
20#:	10	10	10	16	10	10	10	16	10	10	10	16	10	148
21#:	10	10	10	16	10	10	10	16	8	10	10	10	8	138
22#:	10	10	10	14	10	8	10	16	10	10	10	16	10	144
23#:	10	10	10	14	8	10	10	16	10	10	8	16	10	142
24#:	10	10	10	12	10	10	10	16	10	10	10	16	10	144
25#:	10	10	10	16	10	10	10	16	8	10	10	16	10	146
26#:	8	10	10	16	10	10	10	16	10	10	10	12	10	142
27#:	10	10	10	16	10	10	10	0	10	10	10	16	10	132
28#:	10	10	8	16	10	10	10	16	10	10	10	10	10	140
29#:	10	10	10	16	8	10	10	16	10	10	10	14	10	144
30#:	10	10	10	16	10	10	10	16	10	0	10	0	10	122
31#:	10	10	10	14	10	10	10	16	10	10	10	16	10	146
32#:	10	10	10	16	10	10	10	16	10	10	10	14	10	146
33#:	10	10	10	16	10	10	10	16	10	10	10	16	10	148
34#:	10	10	10	16	10	10	8	16	10	10	8	14	10	142
35#:	10	10	10	16	10	10	10	0	10	10	10	12	10	128
36#:	10	10	10	16	10	10	10	16	10	10	10	14	10	146
37#:	10	10	10	16	10	8	10	16	10	10	10	14	10	144
38#:	10	10	10	14	10	10	10	16	10	10	10	14	10	144
39#:	10	10	10	16	10	10	10	16	10	10	10	16	10	148
40#:	10	10	10	16	10	10	10	16	10	10	10	16	10	148
41#:	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
42#:	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0





＜編集ダビングシステム＞



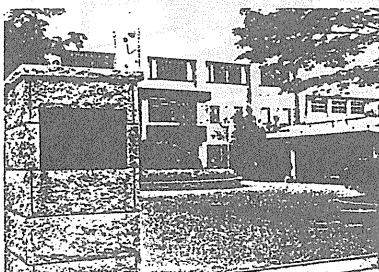
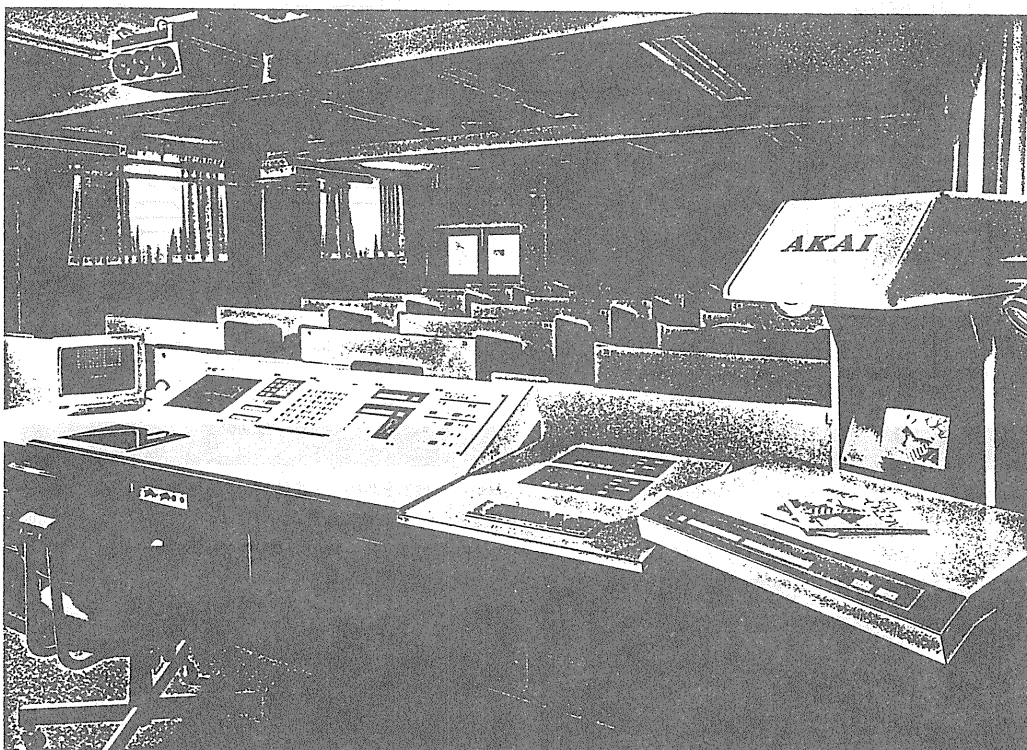
# AKAI

ニューメディア時代の新しい教育システム

## LLフルラボ教育システム

筑波大学附属駒場高等学校

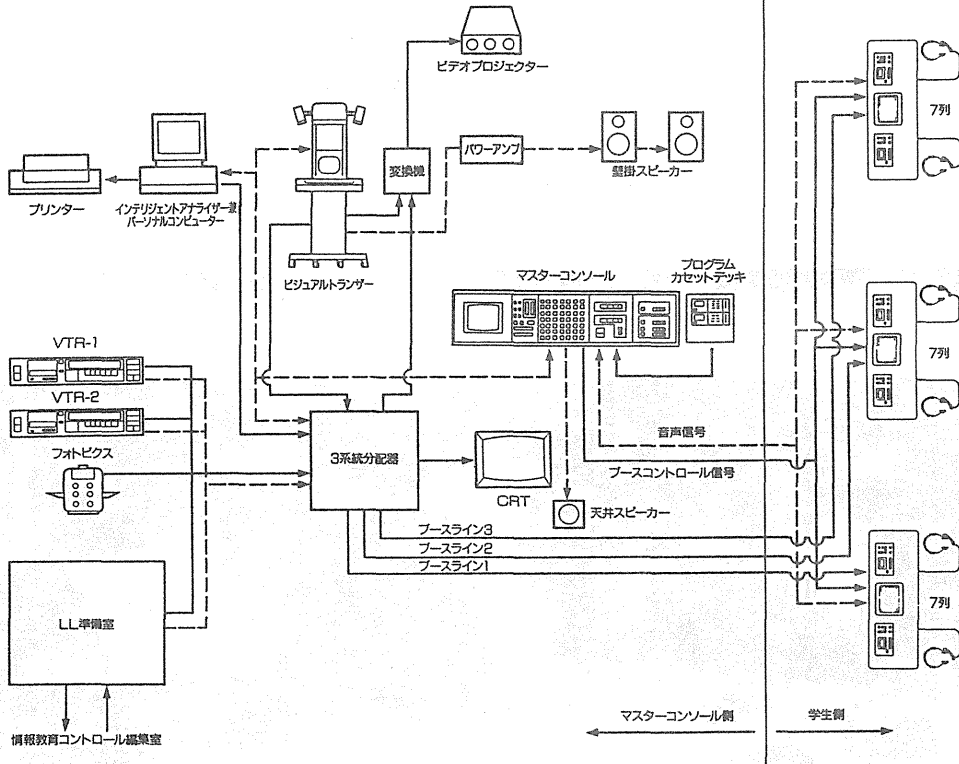
# INFORMATION 89-2



音声、映像、コンピュータにも対応、  
豊富な教材を活用できる、LLフルラボシステム。

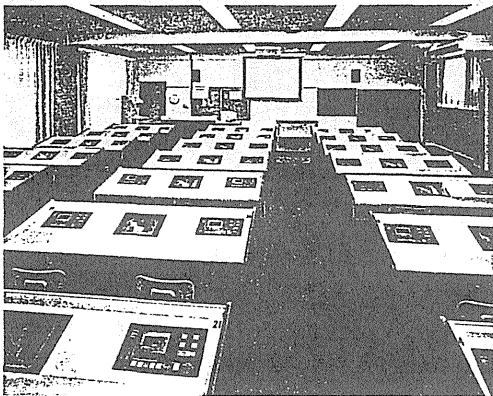
教育の殿堂として、歴史と伝統のある学舎に、ニューメディア対応のLL教室が設置されました。中心となるのは、アカイマスターコンソールLL-100。目的別の操作ボタン、種々の画面が出るオートスキャンカラーモニター、すぐれた機能と使いやすさで定評のあるシステムです。また、ブースデスクには12型カラーディスプレイ、さらに別系統の送り出しとして、コンピュータ画像対応の大型ビデオプロジェクタも装備。2系統の映像による、比較授業もおこなえます。

## システム系統図



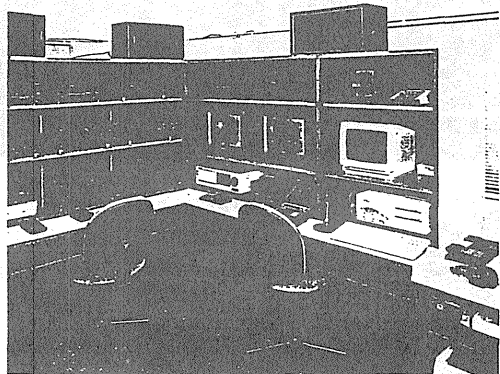
### LL教室

42席のLLフルラボ教室です。便利なリポート機構を備えたブースデッキをはじめ、デスク配列ごとに、3種類の異った映像ソースの送り出しが可能。AVだけでなく、コンピュータ時代にも対応したシステムです。



### LL準備室

各種のAV機器をタイマーと連動。幅広く情報を求め、教育の場に活用しています。また、情報教育コントロール編集室のコンピュータとも回線て結び、各種のデータを、LL教室とデータ交換ができます。



赤井電機株式会社  
 デバイス・特機事業部/営業部  
 〒144 東京都大田区東横谷2 12 14 番03(745)9765ダイレクトイン

## 平成元年度第4回LLA研究会報告

テーマ：「コンピュータによるアナライザーを利用した授業」

### I. 研究授業

授業者： 加藤裕司

#### 【指導案】

1. 日 時 平成元年11月21日(火) 2:10~3:00p.m.
2. 学 級 筑波大学附属駒場中学校2年B組 男子40名
3. 教 材 Elementary LL English Course (大修館) [別紙参照]
4. 指導目標 未来の表現に習熟させる
5. 本時の指導の重点

近接未来を表す現在進行形：

e.g. I hear you are going to Europe.

#### 6. 指導過程

##### 1. 新教材の提示

(1) 文法事項： I'm going to Europe.

(2) その他の表現： I hear you are building a new house.

That sounds exciting.

(3) 新出語： abroad, Switzerland, straight, forgot

##### 2. LL練習

(1) 聞きながら録音

(2) listening

(3) アナライザーによる 'Aurai check'

(4) 対話練習

(5) まとめ

(6) Rhythm Training

### II. LL、AV等の機器の説明、コンピュータ見学

3:00~3:50p.m.

### III. 研究協議会 3:50~4:50p.m.

司会： 長谷川和則

#### 1. 会場校副校長挨拶

#### 2. LLA代表(佐藤 仁先生)挨拶

#### 3. 授業者(加藤裕司先生)自評

自主教材の作成にはなかなか手が回らず、既成教材を利用。授業の手順は、聞きながら教材を一斉に録音させ、その後の練習は各自のペースで行わせる。授業の途中でアナライザーを使ってテストをする。テストの結果はコンピュータに記録される。この4月から始めたばかりで、私自身が初心者なので、種々御教示を賜りたい。

#### 4. 指導助言者(浅野 博先生)の評

指導法、教材、機器の3つの観点がある。

加藤先生は大変落ち着いていて、生徒にもよい印象を与え、それが効果につながる。Recognition か production かの目標段階を明確にしてやる

とよい。理解度を試すのにアナライザーは有効。それによって、生徒にも自分の誤りの原因を反省させる。Mechanicalなdrillも流暢さを養うためには必要だが、communicativeなdrillもしないと、communicationができるようにはならない。

関連教材はいちばん大切。他の教材で聞く、読むの練習をしたら、却って検定教科書も理解できたということもある。

ハードウェアのmedia mixingについては、種々のmediaのどれを混ぜるかは、生徒の学習効果を考慮して選ぶようにする。

#### 4. 研究協議(質疑応答)

起本(ソニー)：この学校〔筑波大附属駒場〕では音声指導と文字指導の時間配分はどうなっているか。

久保野(筑波大附属駒場)：LLの使用はこの4月から始ったばかりで、とりあえず各学級にLLの使用可能な時間を割り当て、既成教材を用いて試行錯誤の最中。中高一貫教育の中でのLLの位置付けは今後の検討課題である。

中高一貫といっても、本校は、私立校とは異なり、前倒しの授業は行っていない。検定教科書は柱として一年とおして使う。

副教材・ラジオ・LL等でいろいろ回り道をして、音としてまず経験させ、最終的には教科書に戻って書けるレベルに定着させるというやり方なので、教科書の進度で見ると、公立校と少しも変わらない。

本校の中学生は高校の入試とは無関係なので、受験に必要なことだけで、他は切ってしまうようなことはしないで済む。そのような回り道の中で、日常語であるにもかかわらず教科書にも入試にも現れることのないような語彙を覚えさせることが可能。

加藤(筑波大附属駒場)：高三ではLLはあまり使っていない。高校になってからLLを始めるのには拒否反応も多い。中一から慣れた生徒が上がって行けば、そういうことはなくなる。

石丸(西柴中)：どのような自主教材を考えているか。

熊井(筑波大附属駒場)：中三を2時間持っているが、そこでは私が作ったFirst Step in Listening(ロングマン社)を使っている。中・高向けの聴解力強化のための教材で、文法項目別で、アルファベットから入ってUnit 12までである。音を聞かせてどんなことが行われているかを言わせる等、いろいろな工夫を施してある。

#### 出席者(五十音順、敬称略)

浅野 博(筑波大) 阿部宗信(秀文出版) 石丸玲子(西柴中)  
大橋いづみ(国際高) 起本 操(ソニー) 加藤裕司(筑波大附属駒場)  
工藤滋樹(ソニー) 久保野雅史(筑波大附属駒場)  
熊井信弘(筑波大附属駒場) 桑原 洋(国際高) 佐藤 仁(中村中)  
河内道宜(ソニー) 田口 徹(太子堂中) 辻 弘(筑波大附属駒場)  
堤 昌生(筑波大附中) 中村 豊(筑波大附属駒場)  
長谷川和則(筑波大附属駒場)

《記録： 中村》

1989年度LL教室使用割当表

月 日 ~ 月 日

	早朝	1	2	3	4	昼休み	5	6	担当	使用者	備考
月			1 B	1 C	1 A				加藤		3学期: 垂水(講師)
火		(1 C 2 A)	1 A 2 B	1 B 2 C	(3 B)		3 C	3 A)	長谷川 加藤 中村		
水		(3 B)	3 C	3 A)	(2 3	2 4	2 2	2 1)	稲岡 新村		3学期: 熊井 (週2時間)
木		(1 1 3 1)	1 2 3 3	1 3 3 2	1 4 3 4)	(1 C	1 A 2 B	1 B) 2 C)	尾崎 熊井 加藤 久保野 中村		*隔週使用
金		(1 3 2 2 2 C	1 2 2 3 2 B 3 A	2 4 2 A) 3 B	1 1 3 C)		1 4) 2 1)		辻 稲岡 久保野 中村		
土			2 A	2 B	2 C				加藤		3学期: 久保野

( ) → 隔週 ( ) → 優先  
( ) → 予備

<連絡・引き継ぎ事項等>

1990年度L.L教室使用割当表

月 日 ~ 月 日

	早朝	1	2	3	4	昼休み	5	6	担当	使用者	備考
月		24	23	22	21				古賀		
火		3C			3A			3B	谷口		
水		1A	1B	1C	2B		2A	2C	谷口 古賀		
木		13	14	11	12				尾崎		
金		<1C <21	1B <3A 22	3B <11 23 <34	1A> 3C> 32> <33		14> 24> 31>		古賀 久保野 中村 辻 加藤 谷口		
土		<2A	2C <13 <33 <34	31> 32>	2B> 12>				中村 美村 加藤 谷口		

<連絡・引き継ぎ事項等>